

令和4年(ワ)第 1880号311子ども甲状腺がん裁判(損害賠償請求事件)
令和4年(ワ)第22539号311子ども甲状腺がん裁判(損害賠償請求事件)
原告 1ほか
被告 東京電力ホールディングス株式会社

意見陳述要旨

2023年3月15日

原告1

1、序章

私は、震災当時高校1年生でした。

家庭科の授業中に地震が発生し、妊婦体験の道具を身に着けながら地震がすぎののを待っていました。食器棚を抑える必要があるほど、大きい揺れだったことを覚えています。

翌日予定されていた模擬試験は中止となり、自宅に帰ったのは、17時頃でした。家に着くと、1階の壁にはヒビが入り、家具は倒れ、本棚にあった本は散乱していました。震災の被害があまりにも大きく、恐怖を感じました。

すぐにテレビをつけ、そのまま震災のニュースを眺めていました。津波が建物や車を押し流していたシーンが記憶に残っています。

翌日、原発が爆発したニュースを見て、母に言われていつでも避難できるよう準備を始めました。母が運転する車で食料調達をしましたが、スーパーやコンビニはどこも品薄で、いくつものスーパーを回りました。バックに非常食や服を詰めたりして、慌ただしい生活でした。でも、私自身は、自分の地域は大丈夫だろうと思っていました。

震災で学校は休みになり、そのまま春休みに入りました。カラオケやボウリングなど、外に出かける頻度も徐々に増えていきました。

当時、バンド活動に力を入れていたので、バンドの練習のために自転車でスタジオに通うこともありました。アジカンやチャットモンチーあたりをよく聞いていて、その曲のコピーをしていました。

友だちと自転車で出かけることについては母親が心配するので、家族には黙って出かけていました。当時は、放射能のことは全く気にしていませんでした。

原発事故前から牛乳が好きだったので、とくに気にせず、毎日500mlから1Lくらい飲み続けていました。地元産の牛乳が一時的に出荷制限になり、飲めない時期があつて悲しかったのを覚えています。

4月になって学校が始まってからは、穏やかな日常を過ごしていました。

空地には、避難者のための仮設住宅が建てられていました。

2、検診

震災から3年経った大学1年の頃に、一斉検査で超音波検診を受けに行きました。会場は結婚式場でした。すぐに検診が終わると思っていたのですが、他の人よりも3～4倍長く感じられました。

検査技師の女性は、機械を使って何度も同じ箇所を往復させ、う～んと言いながら、首を傾けていて、その姿を見て不安な気持ちになりました。

後日、超音波検診の結果が届きました。内容は再検診を受けろというもの。

この時点で、自分の身体に何か良くないことが起きているのでは？と感じていました。

再検診は、自宅からは遠く離れた福島県立医大で受けました。母の運転する車で向かいました。

検査をした「甲状腺センター」の廊下に並んでいる椅子には、多くの患者が待機していて、座りきれず立って待っている人もいました。自分の検査時間まで長くて退屈でした。

再検査では、穿刺細胞診という検査をやりました。

甲状腺がんの疑いのある細胞を吸い取り、悪性かどうかを判断する検査です。

甲状腺のある喉元に、麻酔をすることなく、細長い針を刺されました。

針が喉を貫通したらどうしよう、変なところに刺さらないだろうか、通常の注射とは違う怖さを感じていました。

1回目はうまくとることができず、刺した後に、「あれ？」と言いながら、再び針を刺されました。強い痛みと怖さから、へたくそだな、もうやめてほしい、と心の中で思っていました。2回目もうまくとることができませんでした。

痛みと不快感で涙が出ました。結局、1回で済むところを、3回も刺されることになりました。

1ヶ月後、再度病院を訪れると、医者から、甲状腺乳頭がんと宣告されました。

まさか20歳でガン宣告されるとは思っていませんでした。ガンと聞いた瞬間、「もしかして死ぬのか・・・？」という気持ちになりました。

医者からは、「現状は身体に影響することはありません。ただし、今後ガンが大きくなる可能性があります。その場合、投薬か手術で治療することになります。」と言われました。

母が診察室に残って医者と話している間、診察室の外ですぐに乳頭がんについてスマホで調べました。

【乳頭がん 死亡率】で検索し、「すぐに死に至るガンではない」ことを、

【乳頭がん 手術】で検索し、「手術の成功率も高い」ことを知りました。

これらの検索結果を見て、ほっと胸をなでおろしたのを覚えています。

この日のがんの大きさは9.4mm。まだ10mmに満たないため、すぐには手術せず、経過観察をすることになりました。

まわりを心配させないように、家族以外にはガンになったことは話さないようにしていました。

3、手術

ガンだと宣告されてから、半年に1～2回、経過観察するために通院を続けました。

経過観察の度に乳頭がんが少しずつ大きくなり、自分の体の中で大きくなっていくガンに気持ち悪さを感じていました。そして、2年ほど経った診察日に、リンパ節に転移するかもしれないと診断されました。ガンは確実に大きくなっていました。

医者には、投薬治療する選択肢も与えられましたが、薬で完治するのを待つより、転移する可能性も考慮し、一刻も早くガンを取り除きたいという気持ちから、手術をすることを選びました。

社会人になってからでは時間が取れないと思い、大学4年の夏休みに手術をすることを決意しました。

穿刺細胞診での不信感もあり、母と相談して手術は東京の専門病院で行うことにしました。甲状腺がんの大きさは9.4mmから11.0mmになっていました。

入院期間は1週間程でした。手術前は緊張と不安でいっぱいでした。「手術が失敗したら・・・」「後遺症が残ったら・・・」など、ネガティブな考えばかり浮かんでいました。

そんな不安から、SNSで初めて、ガンであること、これから手術を受けることを発言しました。励ましの言葉を貰ったり、たまたま東京にいた友人がお見舞いに来てくれたおかげで、少しだけ、心を落ち着かせることができました。

手術は全身麻酔で意識を失っている間に終わっていました。

手術台で目が覚めた時に、医者から、「無事成功しましたよ」と言われたときは意識が朦朧としつつも安堵したのを覚えています。

手術直後は麻酔が効いていたこともあり、痛みはまったくありませんでした。

問題はその日の夜中でした。

麻酔が切れた途端、あまりの痛みにナースコールを押して、追加の鎮痛剤を投与してもらいました。1人では起き上がることや、トイレに行くこともできませんでした。痛みでまともにご飯を食べることもできませんでした。

退院後1週間は、鎮痛剤なしでご飯を食べるのは困難でした。手術痕の痛みは1ヵ月ほど続き、暫くは、手術痕が日光に当たらないように気を付ける必要がありました。

残念ながら、今でも手術痕はくっきりと残っています。傷に関して聞かれるのが面倒なので、極力、手術痕が見えないような服を着るようになりました。

手術後も年に1回くらい検査を受けるように言われており、現在も定期的に病院で検査をしています。

再発することを考えると、気分が落ち込んでしまうので、普段は考えないようにしていますが、病院に行って検査結果を聞くまでは、どうしても不安でいっぱいになります。

4、提訴に至る経緯

さいごに、私が提訴することを決めた経緯についてお話しします。

大学を卒業し、就職で上京した後、原発事故後に甲状腺ガンになった人達の集まりに参加する機会がありました。自分は甲状腺の半分を切除するだけで済みましたが、中には全摘出して薬を飲み続けてる人、これから手術を受ける人、ガンになった人の親御さんなど、様々なお話を聞くことができました。

この時まで、自分以外の甲状腺がんになっている人と直接お話することはありませんでした。そして、自分のように元気ではなく、体調が良くなかったり、落ち込んでふさぎ込んでいる人もいることに同情しました。

その過程で、原発が原因である可能性があることを知りました。

今回この裁判に参加した理由は、原発事故後、甲状腺がんで苦しんでいる人たちの手助けができればと思ったからです。

裁判をすることを決めて、他の原告のみなさんと出会い、そのお話も聞いて、自分と同じ気持ちや、自分よりつらい気持ちを背負っている人がいるということを知ることができました。

正直な所、この甲状腺がんが原発による放射線の影響を受けているのか、私には分かりません。様々な情報が飛び交っていて、判断が難しいと思っています。

ですが、可能性が0ではないからこそ、この場で発言をしています。

裁判の結果がどうであれ、裁判官の皆様には原告が納得できる結論を出して頂きたいと思っています。

以上